

『月刊民藝・民藝』復刻版概要

原本 発行所＝日本民藝協会／編集発行人＝浅野長量

編集責任者＝式場隆三郎

発行＝第1号（1939年4月）～第70号（1946年7月）

体裁 A5判・上製・総4,930頁（各巻平均約410頁）

別冊 解説・総目次・執筆者索引
（別冊のみ分売可＝1,000円＋税）

ISBN978-4-8350-6177-1

解説 水尾比呂志〈日本民藝協会 会長〉

尾久彰三〈助 日本民藝館 学芸員〉

杉山享司〈同学芸員〉

村上豊隆〈同学芸員〉

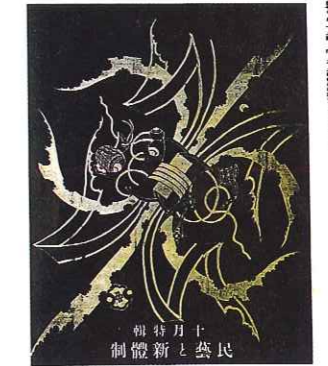
白土慎太郎〈同学芸員〉

推薦 大城立裕・鶴見俊輔・水尾比呂志

定価 本体揃価格180,000円＋税

配本 全2回配本（2008年7月・2008年12月）

藝民刊月



復刻版 巻数	原誌号数	原誌発行年月	本体価格 配本年月・ISBN
第1回配本	第1巻 第1号～第5号	1939年4月～8月	90,000円＋税 2008年7月 978-4-8350-6163-4
	第2巻 第6号～第9号	1939年9月～12月	
	第3巻 第10号～第15号	1940年1月～6月	
	第4巻 第16号～第20・21号	1940年7月～12月	
	第5巻 第22・23号～第27号	1941年2月～6月	
	第6巻 第28号～第32号	1941年7月～12月	
	別冊（解説・総目次・執筆者索引）		
第2回配本	第7巻 第33号～第38号	1942年1月～6月	90,000円＋税 2008年12月 978-4-8350-6170-2
	第8巻 第39号～第44号	1942年7月～12月	
	第9巻 第45号～第49号	1943年1月～5月	
	第10巻 第50号～第56号	1943年6月～12月	
	第11巻 第57号～第63号	1944年1月～7月	
	第12巻 第64号～第70号	1944年8月～1946年7月	

*第69号は発行不詳のため未収録です。

月刊民藝

柳宗悦らによって見出された「無銘」の道具。自然の風土から生まれた「健全な美」を感受し、失われつつある生活文化を追求し続けた運動の足跡。

全12巻・別冊1
復刻版

不二出版

藝民刊月



八月号 竹工の藝

民藝



十一月号

発行所 日本民藝協会

原本 1939年4月～1946年7月（第1号～第70号）

第1回配本 2008年7月

〔第1巻～第6巻＋別冊1 ◎本体揃価格90,000円＋税〕

第2回配本 2008年12月

〔第7巻～第12巻 ◎本体揃価格90,000円＋税〕

定価 全12巻＋別冊1 ◎本体揃価格180,000円＋税

推薦 大城立裕・鶴見俊輔・水尾比呂志

不二出版

*表示価格はすべて税別

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-2-12
TEL 03-3812-4433 FAX 03-3812-4464
振替 00160-2-94084

『月刊民藝・民藝』の復刻を悦ぶ

水尾比呂志（日本民藝協会会長）



『月刊民藝』は、日本民藝協会の機関誌として、昭和十四年（一九三九）四月に創刊、同十七年一月から『民藝』と改称されて同十九年（一九四四）十二月まで、全六十八冊が刊行された。周知の通りこの時期は、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発し、わが国も中国との交戦から太平洋戦争に突入、緒戦の好況忽ちに潰れて完敗の終結に転落して行った、未曾有の大動乱期であった。その五ヶ年八ヶ月の間、三度の合併号は出しながらも、毎月発行を続けたこの雑誌の存在は、昭和二十年八月の敗戦から今日に至るまで、ほとんど忘れ去られてきたのである。戦後に民藝運動が活気を呈した折にも、その後、世の好尚が民藝のブームを惹き起した頃にも、民藝関係者の間でさえこの雑誌に対する関心は希薄であつたと言わねばならない。私自身も、必要あつてその内容を瞥見する度に、注目検討するべき多くの事柄が含まれていることに気付かされつつ、詳読せぬままに打過ぎてきた。この度、『月刊民藝・民藝』の文献価値への認識のもとに、不二出版による復刻が企画され実現の運びとなつたことは、まことに悦びの極みである。この復刻版の刊行は、世界の生活文化史上稀有な事蹟と考えられるべき民藝運動の、戦時下の実状を知る場を拓けるとともに、それを現在の生活文化に照応させて在り様を検証するよすがともなり得るだろう。

復刻という事業は華やかな出版活動とは異なり、地味で収益も少ないが、不二出版は敢へてこの分野で多岐にわたる実績を重ねた書肆である。その価値ある事業に『月刊民藝・民藝』復刻を加えられた義挙に謝するとともに、これが江湖に貴重な知見をもたらすものであることを、ひろく吹聴する次第である。

『月刊民藝』一九四〇年二月号の目次（原本を六二％に縮小）

月刊民藝 二月号 目次
支那民藝特輯

表紙 大同の石佛・宮田重雄撮影
カット扉 花機児
裏表紙 坂本万七

柳宗悦	（一）
濱田庄司	（二）
中丸平一	（三）
中丸平一	（四）
柳宗悦	（五）
棟方志功	（六）
式場隆三郎	（七）
濱田庄司	（八）

支那民藝の現地報告 吉田璋也（一）

支那民藝解説・喜眞版

支那工藝隨筆

麻雀をつくる人々……式場隆三郎（一）
 支那に摘む花束……恩地孝四郎（二）
 支那陶磁器の力……小川龍彦（三）
 綉花……吉田璋也（四）
 満洲の民藝……森田龜雄（五）
 再び琉球へ……鈴木訓治（六）
 焼物のうつしかた（工藝問答）……坂本万七（七）
 南方文化の探究（書評）……田中俊雄（八）
 琉球日記……日本民藝協会同人（九）

晴雨計……永尾ふぢ子（一〇）
 協働だより……滝沼善實（一一）
 たくみだより……式場隆三郎（一二）
 民藝雑記……
 編輯後記……

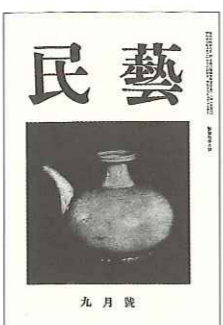
1925年

- 一九二五 柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司、紀州行の旅中「民藝」（『民衆的工芸の略』という新語を作る）
- 一九二六 富本憲吉・河井・濱田・柳の四人連名で「日本民藝美術館設立趣意書」を配布。
- 一九二七 相馬貞三らが柳門下に参入。
- 一九二八 東京上野公園の御大札記念国産振興博覧会に、民藝同人設計になる「民藝館」を出品。
- 一九二九 京都大毎会館で日本民藝美術館主催の大規模な「日本民藝品展」を開く。このとき初めて民藝品の挿絵入り目録を製作、あわせて「日本民藝品図録」を編集。
- 一九三一 雑誌「工藝」創刊（二二号は青山二郎と石丸重治、三二号以後終刊（第一二〇号）まで柳宗悦が編集）。
- 一九三二 浜松の高林兵衛邸内に日本民藝美術館を開館（昭和八年四月閉館）。
- 一九三四 京都で鳥取の吉田璋也、島根の太田直行ら「山陰新作工芸展」を開催（一月に東京でも開催）。
- 一九三六 パーナード・リーチが一年ぶりに来日、柳・河井・濱田らと各地を廻る。
- 一九三七 日本民藝協会設立（会長・柳宗悦）。協会事務所を東京本所の浅野長量方に設置。
- 一九三八 東京銀座馬場屋で民藝館主催「第一回秋季新作工芸展」開催。
- 一九三九 東京高島屋で日本民藝協会主催「現在朝鮮民藝品展」（八月京都高島屋）。
- 一九四〇 柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司が沖繩を訪問。
- 一九四一 民藝協会同人による二回目の沖繩行き。「日本民藝協会機関誌『月刊民藝』創刊」。
- 一九四二 柳宗悦「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」。
- 一九四三 柳宗悦「工藝の協働に関する一提案」。
- 一九四四 東京高島屋で日本民藝協会が「琉球新作工芸展」、日本民藝協会主催の「琉球観光団」による三回目の沖繩旅行。▼「たくみ」特輯。
- 一九四五 柳宗悦「再び民藝に就て」。
- 一九四六 柳宗悦「現代生活と民藝の本質」。
- 一九四七 工房評論「芹澤銈介氏について」。
- 一九四八 「支那民藝」特輯。
- 一九四九 「日本文化と琉球の問題」。
- 一九五〇 柳宗悦「柳田國男対談「民藝と民俗学の問題」」。
- 一九五一 柳宗悦「工藝の性質」（一六号まで連載）。
- 一九五二 「その後の琉球問題」。
- 一九五三 東京日本橋三越で日本民藝協会と雪国協会共催の「東北六県民藝品展」。
- 一九五四 「日本民藝と益子焼」特輯。
- 一九五五 柳宗悦「四回目の沖繩旅行」。
- 一九五六 民藝現況報告「山陰地方」「北支」。
- 一九五七 柳宗悦「民藝と新体制」特輯。
- 一九五八 河井寛次郎・濱田庄司・柳宗悦「焼物談義」。
- 一九五九 「民藝と新体制」特輯。
- 一九六〇 日本民藝協会、紀元二千六百年奉祝記念事業として、日本民藝館で「琉球工芸文化展覧会」、東京三越で「琉球風物写真展覧会」「日本生活工芸展覧会」開催。
- 一九六一 「沖繩言語問題」特輯。
- 一九六二 座談会「新しい生活文化の諸問題」。
- 一九六三 「北支工藝」「棟方志功の版画」。
- 一九六四 「女子労働者の生活様式」特輯。
- 一九六五 座談会「農村と労働者の文化」。



1946年

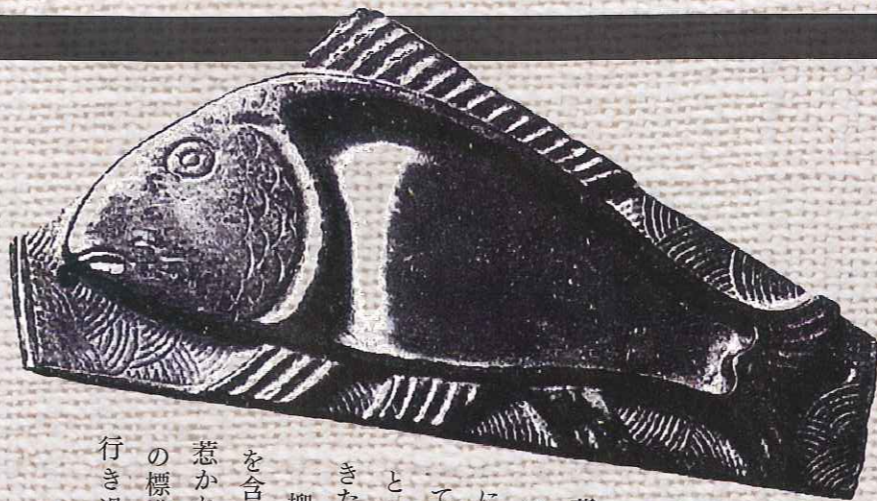
- 一九四二 柳宗悦「地方文化の価値」。
- 一九四三 協賛会「地方文化と手工藝」。
- 一九四四 座談会「民藝と生活」。
- 一九四五 式場隆三郎「衣川の生活と工藝」。
- 一九四六 座談会「生活文化の諸問題」。
- 一九四七 座談会「労働者の住宅に就いて」。
- 一九四八 「竹の工藝」特輯。
- 一九四九 座談会「労働文化を語る」。
- 一九五〇 座談会「宗教と工芸について」。
- 一九五一 「和紙」特輯。
- 一九五二 座談会「東北地方の民藝を語る」。
- 一九五三 「独逸の工芸文化」特輯。
- 一九五四 座談会「民藝を語る」。
- 一九五五 雑誌「月刊民藝」を「民藝」と改題。「日本民藝協会会則」を制定、会の目的を「本協会ハ民藝運動ニ立脚シ、簡素、健康、国民的ナル生活文化ノ創造ニ寄與センコトヲ目的トス」とし、地方支部制をとることとした。▼村岡景夫「戦時下に於ける民藝」。
- 一九五六 「工芸教育の反省」。
- 一九五七 村岡景夫「地方文化の意義と民藝」。
- 一九五八 河田嗣郎「経済と美術・工藝」。
- 一九五九 「開拓文化」特輯。
- 一九六〇 遠藤元男「中世的産業精神」。
- 一九六一 「国民工芸運動への展望」特輯。
- 一九六二 「秋田の樺皮細工」。
- 一九六三 柳宗悦「民藝と東北」。
- 一九六四 麻生重一「民藝並びに民藝運動の大乗的転換」。
- 一九六五 工芸の統制機関「大日本工芸会」発足。日本民藝協会は解散せず参加することを認められる。▼座談会「新作家具と工芸品について」。
- 一九六六 座談会「総力戦下の工芸を語る」。
- 一九六七 吉田璋也「北支通信」。
- 一九六八 柳宗悦「台湾の生活用具について」。
- 一九六九 田中俊雄「かすり」といふ言葉」。
- 一九七〇 式場隆三郎「大谷の民藝」。
- 一九七一 「現代日本民藝総覧」。
- 一九七二 柳宗悦「完全品と疵物」。
- 一九七三 外村吉之介「満洲民藝調査日記」。
- 一九七四 鹿間時夫「山西の民藝」。
- 一九七五 「工藝」一四号発行、以後昭和二十二年二月まで三年間発行中断。
- 一九七六 高橋實「木船と船匠の記録」。
- 一九七七 式場隆三郎「満洲記」（六八号まで連載）。
- 一九七八 武田久吉「農村の生活と信仰」。
- 一九七九 吉田璋也「江南の民藝」。
- 一九八〇 宮木友治「栗谷老人覚書」。
- 一九八一 「傷痍軍人と民藝」特輯。
- 一九八二 「工藝」「民藝」の用紙焼失。▼座談会「花筵と技術保存」。
- 一九八三 「民藝」第六八号発刊後、第七〇号（二十一年七月）まで刊行できず。
- 一九八四 座談会「硯工小野文吉覚書」。
- 一九八五 日本民藝館、時局急迫のため一時休館。
- 一九八六 日本民藝館再開。
- 一九八七 「民藝」復活第一号七〇号を発行。この号で自然終刊となる。▼柳宗悦「民藝の強み」。
- 一九八八 式場隆三郎「日本再建と民藝」。
- 一九八九 「民藝協会の現状」。



沖縄文化の鏡

大城立裕（作家）

沖縄の近代文化史に「沖縄方言論争」なるものがある。背景に沖縄の近代教育の柱としての「標準語教育」があり、それは「方言撲滅」とほぼ同義語であった。琉球王国から日本の沖縄県になった沖縄の、日本への同化という文化的苦悶のあらわれで、学校教育の現場のみならず家庭においても標準語励行が奨励された。



たまたま昭和十五年の新春に、柳宗悦をリーダーとする民藝の仲間が沖縄観光に訪れた機会に、この風潮を観て嘆き、批判したところから論争が起きた。
柳らは沖縄の民藝を含む文化の独自性に惹かれていたから、「県」の標準語励行の指導は行き過ぎではないか。

このひとすじの道

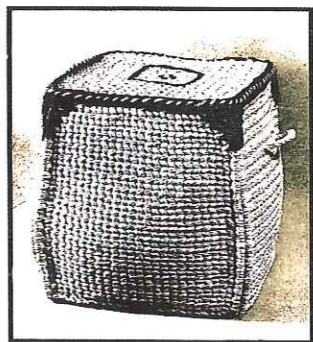
鶴見俊輔（哲学者）

明治元年に、近代日本ははじまる。政府としてはそうだが、日本の文化としては、そうではない。明治元年以前の、とくに手仕事についての伝統に柳宗悦は、眼をひらかれた。そのことが民芸運動のはじまりだった。

雑誌「工藝」は昭和六年にはじまり、「月刊民藝」は昭和十四年にはじまる。両年はそれぞれ、満洲事変（昭和六年）、日中事変（昭和十三年）に踵を接して発足しており、その時代の日本国内部の動きとの交渉の下に発行されて大東亜戦争終戦に至る。この長い戦争に対する柳の態度は「ブレードとホイットマン」のような小部数発行の雑

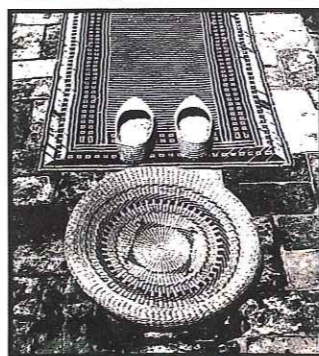


月刊民藝



七月号 文化芸術

民藝



四月号

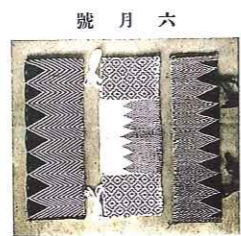


民藝



六月号

月刊民藝



六月号

月刊民藝



創刊号

沖縄の方言は、将来の日本の言葉を磨くにも大切なものだ」と言い、県当局は「民藝の主張は沖縄の同化、近代化志向の苦悶を知らないものだ。沖縄を骨董品あつかいするな」と言った。
論争は一年もつづき、民藝の主張の多くは雑誌『民藝』に発表された。その完全な姿を、このたびの復刻で観ることができるわけである。
もちろん『月刊民藝』は、一年間の言語問題にかぎらず、沖縄の民藝一般について長期の関心でひろく価値を拾い上げ、二十世紀の沖縄文化の鏡としていし、それを二十一世紀への問題提起にもしているものと、総目次を見て確信する。今日の日本文化はそれを求めているはずである。

上記表紙は右から、『月刊民藝』一九四一年七月号、『民藝』一九四二年四月号、『民藝』一九四六年第七〇号、『民藝』一九四二年六月号、『月刊民藝』一九三九年六月号、『月刊民藝』一九三九年創刊号。

誌の編集後記に明らかであり、大部数発行の『月刊民藝』においては、読み手によって多様に読める。しかし、明治以前からの手仕事を守るといって態度で一貫している。
すぐれた手仕事への敬意。そのつくりだした器を心をこめて使う。ぞんざいな生き方をさける。これらのことについての一貫性が民芸運動を支える理想としてつづいた。
それは、敗戦後の日本社会に対して、対立する理想である。

日本の知識人は、明治はじめに欧米の知識をとり入れて以来、〇〇はもう古いと言いつづけてきて、学習をくりかえしては、卒業することを習慣としてきた。その習慣は、米国に負けてその影響下におかれて以来、さらに深まった。柳宗悦と彼に啓発された民芸運動は、日本の知識人の運動としてはめざらしく、何々は古いと言いつづけてくやし卒業する風習から自由であり、戦後からさらに遠くはなれた今日の日本文化の中で独自の位置を保っている。





民藝の強み

柳宗悦

民藝と云ふ言葉が示唆するやうに、私達は「民」を基礎とする美を説いた。顧ると之を説き始めてから、早くも二十年の歳月が過ぎた。之れ迄美の領域に於て「民」の價値を強調した主張は他になかつた。「民」の一字は平凡な世界を聯想させたに過ぎなかつたからである。

尤も近世社會思想の面に於て、民衆のことが大きな題材であつたことは言ふを俟たない。併し之れ等の思想は主として經濟問題を軸として展開された。私達の民藝論はそれ等の思潮の影響に依るものではなかつた。又多くの藝術論のやうに外來の主張を受繼いだものでもなかつた。吾々が直接に「民」の領域に美の世界を見たことに始まる。さうして後にそれを思想的に整理して民藝論を建てるに至つた。決して最初から主張を振擧して民藝の價値や意義を説いたのではない。ましてその主張に合致させるために民藝の美を是認したのではない。若し理論が先んじてゐたならば、恐らく一面的な見方に終つたであらう。さうして永年に亘つてそれを護持することは困難であつたと思へる。併し私達は先づ見たのである。見て後知つたのである。このことは私達に動かない信念を誘つた。信念は理論よりもつと堅固なものである。かゝる意味で民藝運動は寧ろ宗教運動に近い。従つて一つの造形美論の形は取るが、一種の精神運動であると云ふ自覺を抑へることが出来ない。日本に於ける工藝運動にこの性質を帯

第70号1946年7月号掲載の柳宗悦「民藝の強み」(原本を90%に縮小)

主要執筆者一覧

浅沼喜実	式場隆三郎	長谷川富三郎
浅野長量	寿岳文章	長谷川如是閑
新井信夫	新村出	浜田庄司
荒木道子	鈴木訓治	宮武辰夫
石黒修	鈴木たけよ	三代沢本寿
上野訓治	芹沢銈介	棟方志功
上村六郎	相馬貞三	村岡景夫
梅原龍三郎	高橋実	本山桂川
江馬務	武田久吉	森本信也
大熊信行	只野淳	保田与重郎
岡村右吉衛門	田中俊雄	柳宗悦
小川竜彦	塚田泰三郎	柳八重子
恩地孝四郎	土岐善麿	柳悦孝
河井寛次郎	徳川夢声	柳田國男
河田嗣郎	外村吉之助	山口弘道
河辺昌久	外村繁	山田宗作
蔵原伸二郎	富木友治	山折寅二郎
剣持勇	中尾信	吉川保正
今和次郎	永野為武	吉田璋也
佐久間藤太郎	中村精	バーナード・リーチ
桜木俊晃	中村武羅夫	
鹿間時夫	萩原朔太郎	

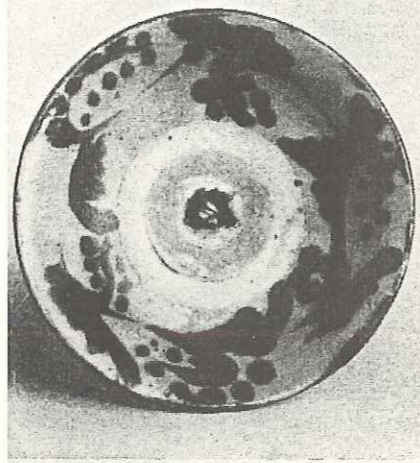


琉球壺屋の小橋川仁王の仕事場である。老人はいま徳利をつくつてゐる。この壺は蹴鞠の土の肌は水々しく生氣づいてゐる。うしろで息子がおぼきな壺の水びきをしてゐる。隣に赤い屋根が、すきとほるやうな青空を背にして、顔にはいつた繪のやうにうつくしい。壺のよわるのをみてゐると軒にかけた籠の鳥が、いゝ聲でな

1940年元旦、沖縄に向かう民藝協会同人。柳宗悦、濱田庄司、式場隆三郎、棟方志功、外村吉之介、坂本万七、土門拳らが参加。



第8号1939年11月「琉球特輯」の記事(原本を90%に縮小)



関連書籍(復刻版)

ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム

〔GE・GJM・GAM・PRR・GJMGEM〕
玉村善之助・橋本健吉・野川隆繩/エポック社発行
▼一九二四(大正一三)年〜一九二六(大正一五)年
▼全一〇冊・別冊一
体裁 B5判変形・並製・函入・総二五二頁
解説 梅宮弘光・五十殿利治・澤正宏・西田勝
推薦 五十殿利治・澤正宏
定価 本体価格三〇、〇〇〇円十税

築地小劇場

小山内薫・土方与志ほか編
▼一九二四(大正一三)年〜一九三〇(昭和五年)
▼全六三冊・別冊一・付録一
付録 ポスター四枚・上演プログラム七五枚
体裁 A5判・菊判・並製・函入・総四、〇〇〇頁
解説 祖父江昭二
推薦 飯沢匡・千田是也・滝沢修・松本克平・水品春樹・山本安英
定価 本体価格八七、〇〇〇円十税

生長する星の群

武者小路実篤主宰
▼一九二二(大正一〇)年〜一九二四(大正一三)年
▼全一〇巻・別冊一
体裁 A5判・上製・函入・総四、九二四頁
解説 田中榮一
推薦 今井信雄・紅野敏郎・渡辺貫二
定価 本体価格一四、〇〇〇円十税

うるま新報

『うるま新報』継続改題紙
▼一九四五(昭和二〇)年八月〜一九五一(昭和二六)年九月
▼全六巻
体裁 B4判・上製・函入・総一、九四四頁
解説 新崎盛暉・丹野喜久子
推薦 小川政亮・我部政男・福島鑄郎・宮城悦二郎
定価 一六八、〇〇〇円十税

琉球新報

『うるま新報』継続改題紙
▼一九五一(昭和二六)年九月〜一九五六(昭和三一)年二月
▼全二七巻
体裁 B4判・上製・総九、五四八頁
解説 新崎盛暉
推薦 我部政男・門奈直樹
定価 七五六、〇〇〇円十税

占領期・琉球諸島新聞集成

『宮古民友新聞』『みやこ新報』『南西新報』『海南時報』『奄美タイムス』収録
▼一九四五(昭和二〇)年〜一九五三(昭和二八)年
▼全一六巻
体裁 A4判・上製・総六、一四〇頁
監修 新崎盛暉
解説 仲宗根将二・大田静男・弓削政己
定価 四四八、〇〇〇円十税

史蹟名勝天然記念物【大正編】

▼一九一四(大正三)年〜一九二三(大正一二)年
▼全三巻・別冊一・付録一
体裁 A4判・A5判・上製・総一、五一〇頁
解説 丸山宏
推薦 荒山正彦・上田正昭・榮原永遠男・羽賀祥二
定価 六八、〇〇〇円十税

史蹟名勝天然記念物【昭和編】

▼一九二六(大正一五)年〜一九四四(昭和一九)年
▼全五二巻・別冊一
体裁 A5判・上製・総二、八一〇頁
解説 高木博志
推薦 荒山正彦・上田正昭・榮原永遠男・羽賀祥二
定価 八八〇、〇〇〇円十税